

平成18年11月17日

「東工大精密工学研究所知財シンポジウム 2006 開催報告レポート

シンポジウムプログラム委員長

大嶋洋一

平成18年11月10日、横浜市はまぎんホールにおいて、「第3回東京工業大学精密工学研究所知財シンポジウムー半導体における知財戦略ー」が開催されました。同シンポジウムは、知的財産に関する講演会が多数存在する中で、半導体産業にフォーカスしたシンポジウムとして特徴を有し関係者に好評を得ています。後援機関には、半導体、知財関係の代表的な団体（日本半導体製造装置協会（SEAJ）、日本特許情報機構（JAPIO）、半導体産業研究所（SIRIJ）、（株）半導体先端テクノロジーズ（Selete）、（株）半導体理工学研究センター（STARC）、IEEE Electron Device Society/Japan Chapter、SEMI ジャパン、等）が名を連ね、今年も200人超の参加者を集めました。今年は、特に、知財評価に焦点を当て、地方公共団体、企業、弁理士、大学研究者、ベンチャーキャピタル等の有識者からの講演がありました。各スピーカの概要は以下の通りです。



中田 宏氏（横浜市長）

「創造都市・横浜発の新たな知財戦略」

中田氏からは、横浜市が知財都市を目指し、そのための具体的な支援活動について紹介があった。特に、日本でさきがけ的な取組として興味深いのは、知財マネジメント支援機構を設立した点である。同機構は、公募の企画段階から民間の有識者の意見を取り入れ、官民の協働で設立した会社であり、官の信用と民の知恵を組み合わせた新しいタイプの知財支援活動である。同機構は、世の中で必要とされる様々な知財関連サービス事業、例えば知財経営の支援、知財評価、知財移転・流通等の展開を予定しており、これまで多くの関係者が待ち望んでいたサービスの提供を充実したスタッフを抱えて開始する。この機構が成功すれば、全国でも同様なニーズが起きることは必至であり、今後の展開が注目される。

同機構は、世の中で必要とされる様々な知財関連サービス事業、例えば知財経営の支援、知財評価、知財移転・流通等の展開を予定しており、これまで多くの関係者が待ち望んでいたサービスの提供を充実したスタッフを抱えて開始する。この機構が成功すれば、全国でも同様なニーズが起きることは必至であり、今後の展開が注目される。

Anup K. Thakur 氏（インド経済商務公使）

「インド経済と知財戦略」

Thakur 氏からは、インドの経済成長率を支えるその人的資源（人口世界第2位10億5千万人、



50%以上が25才以下、20万人/年の大学卒エンジニアの輩出)、財政事情(インド投資委員会による今後5年間に5000億ドル以上の投資、名目GDP\$714/人(世界10位)、2003年以降の実質GDP成長率8%平均)等の説明に加え、インドの知的財産制度について紹介がなされた。インドの知的財産制度は、特許法、商標法、意匠法、地理的表示に関する規律、著作権法などがTRIPS加盟国として順調に整備されているとの説明があった。例えば、特許取得に関する要処理期間は現在50~60ヶ月となっており、旧来の100ヶ月から大幅に改善されている旨等、国をあげて知財制度の整備を行っていることが力説された。



田中 信義氏

(キヤノン株式会社 専務取締役 知的財産法務本部長)

「企業経営における知的財産」

田中氏からは、企業における知的財産についてキヤノンが実際に取り組んでいる活動について説明がなされた。最先端技術開発に取り組む企業であれば、新たな知的創出を行うことは必須のプロセスであり、そこで生まれる知的財産の価値を認識することが重要であることが指摘された。そして、創業者利益を確保するために必要であれば知的財産権として権利化するのが知的財産制度の基本的な活用姿勢であることを力説された。また、研究成果によるリターンは、長い時間がかかるとの認識に基づいて、研究開発から知的財産管理に至るまで長期的な視点での戦略立案の必要性が説かれた。

岡田 依里氏(横浜国立大学大学院国際社会科学部研究科教授)

「経営学と知財評価のコンテキスト:サイエンススペースの革新へ向けて」

岡田氏からは、知的財産の評価に関する経営的な視点から見た分析が紹介された。知的財産については、「知的財産の評価をしたい」というコンセンサスは形成されているが、どういった知的財産が高い評価が得られるかの因果関係



がはっきりしていない段階にある。この段階においては「リーダーシップツール」といわれる、強い指導力のもとに、一定の方向性を打ち出していく評価ツールが有効であるとの説明がなされた。また、因果関係がはっきりしない不確かなコンテンツの集合から、管理可

能な方向性が生まれるのには、**Garbage can model** といわれる偶然性に支配されているが、偶然を必然に変える契機となるのは、ニーズの変化を的確に捉え、その方向性を加速することができる自律性のある個人と組織で存在であることが指摘された。



谷川 英和氏

(IRD 国際特許事務所 所長・弁理士、京都大学 COE 研究員)

「半導体産業における弁理士の視点から見た知財評価への取組」

谷川氏からは、発明が生まれてから特許となり、それが活用され、消滅するまでのプロセスを、いかに効率的に管理すべきか、とい

う観点から特許工学という体系として捉えることが紹介された。特に、特許評価については、特許明細書の品質に関して評価可能な特許明細書品質評価ツールと、人的評価を教師データとして用いることにより自動的に特許価値評価を実現可能な特許価値評価ツールについて紹介された。前者については、これを特許教育機会に活用することで、より品質の高い明細書の作成にも活用できるとの指摘がされた。また、後者については、これをパテントコンテストへの適用した結果を発表し、特許面の評価としては、授賞特許は一定の水準を有していることが実証された。

小林 永芳氏

(株式会社テクノロジーアライアンスグループ代表取締役社長 兼 三菱商事株式会社電子産業事業開発ユニットプリンシパル)

「半導体産業におけるベンチャー起業の視点での知財戦略」

小林氏からは、自身の米国ベンチャーの立ち上げの経験に基づき、ベンチャー企業にとって知的財産がいかに重要であるかについ



て紹介された。ベンチャー企業は、「小さな池の大魚」たることが必要であり、そのために、知的財産の活用が不可欠であることを力説された。特に、半導体産業においては、大量の出願構造から、自社の特許のポジショニングを正確に把握することが必須なスキルであり、そのために有効な特許情報分析ツールが紹介された。



渡辺 久士氏

(豊橋技術科学大学客員教授)

「半導体産業における大学から見た知財評価への取組」

渡辺氏からは、大学における知財評価の実状について、半導体技術を事例に追って、紹介された。大学の研究者にとっては、研究開発テーマはライフテーマとなっていることが多く、研究に対する否定的な評価が、人的評価に直結し

やすい固有の問題点に対する配慮が必要との指摘がなされた。また、名古屋大学における成功例として、初代パテント・オブ・ザ・イヤー（2004）授賞の赤碕教授の開発事例が紹介され、成功の理由には、開発者の実用化に対する熱意とそれを理解し支える知財専門家のサポートがキーポイントであることを力説された。

大嶋 洋一

東京工業大学 精密工学研究所 客員教授
(シンポジウムプログラム委員長)

「半導体産業における技術動向の視点から見た知財評価への取組」

当方からは、半導体産業の技術動向について特許情報を解析しながら分析し、今後の注目分野に対する指摘、日本の世界における相対的ポジショニングについて紹介した。特定

技術分野の浸透度や動向を知るためには、キーワード検索が適しており、米国特許をデータベースにした指標である「Semiconductor Patent Ratio (SPレシオ)」を紹介した。また、半導体産業構造を、ハードウェアとソフトウェアに区分した上で、各区分に対応してプラットフォーム、インターフェース、エレメントの各階層に区分し、各区分に上記指標を用いて解析した結果、今後の半導体分野の注目すべき技術分野として、特に、インターフェース技術分野が重要であると結論づけた。



<所感>

多彩な顔ぶれから伺われるように、知財評価に対するニーズは様々な場面で求められていることは実感された。他方、各場面で求められている評価目的は異なり、特許に対する評価手法も普遍的な手法が確立しているわけではないこともわかった。そして、知財評価

の現場でおこなわれている、具体的な評価については、事柄の性質上、公開されている情報は限定的な状況にある。

以上の事情を総合的に考慮すると、知財評価において重要なポイントは、自分たちが何のために特許を評価しようとしているかを明確にすること、また、自分の評価しようとする特許の属する知的領域を含めて法的、制度環境、及び技術的環境について理解を深めること、さらに、どのような評価ツールが自分たちの目的を達成するために有効なツールとなりうるのかのその機能や特徴を知り置くことが重要となる。

今回のシンポジウムも、半導体産業関係者にとって、大学研究者にとっても企業研究者にとっても、知的財産に関する有益な情報を提供する貴重な機会として位置づけられるであろう。シンポジウム終了後の継続開催への多くのリクエストの声に応えられるよう、今後も、知的財産制度の啓蒙活動の場として役割を果たせるシンポジウムに発展させて行きたい。



シンポジウム会場風景